

2011 年活動レポート

EbetsuShiht Forum から白熱教室まで

2011/07/23

東海大学研究生レポート

山田和樹

本レポートでは、東海大学研究生として活動してきた学内、学外活動の報告を行います。

後の学生たちの活動資料として運用ないしは参考としていただければ幸いです。

目次

EBETSUSHIFT FORUM	3
講演会開催の経緯	3
誰も予想していなかった事	3
圧倒的に不足している時間と人手	3
鈴木氏への講演依頼	4
予算なしの奥の手	4
講演会の手法は？	4
公演会場選び	4
意外な難航	4
酪農大学	5
メディアへの公表	5
公表前に何故か知られていた	5
東日本大震災	5
会議中に揺れた	5
ノレーン大使出席出来ず	5
当日	6
予想以上の来場者数	6
第1部とワールド・カフェ	6
第2部の鼎談。その後	6
今後	6
ライフクリージングのワールド・カフェ	8
もう 1 つの学生主導	8
白熱教室	8
次期スウェーデン大使との公開講座	8
3 カ国の学生と	8
消極的な学生	8
懇親会での会談	9
2010 年から 2011 年の活動考察	9
誰も出来ない事をやる為に	9

EbetsuShift Forum

講演会開催の経緯

誰も予想していなかった事

昨年 2010 年 10 月。北海道大学名誉教授鈴木 章氏がノーベル化学賞を受賞された時、私は酪農大学の講義を受講していた。この時は純粋に講義内容について聞きに行つただけであったのだが、そのニュースを受け、私は 1 つの提案をした。それは、「鈴木教授を江別に招いて講演会の様な事を出来ないだろうか?」と言う物である

これは鈴木氏が江別在住の方であり、またその講義に林かづき市議会議員が同席されていた事が理由であった。

当初はそのような事が出来るのかどうか、という理屈抜きで思った事を口に出したため、恐らく反対されるのではないかと思っていた。ところが、林議員も、またその講義を行っていた当大学の川崎教授もやってみようと言ってくれたため、実際に実行に移す事になったのである。私はこの時、最初に言った人間が大抵の事の責任を負う事を、今更ながらに思い知らされていた。

圧倒的に不足している時間と人手

この講演会の準備で、何よりも厳しかったのが人手不足である。実行委員長となった私は、だがこうしたイベントを指揮する事自体が初めてであり、まず何から手を付けていけばよいのか分からなかった。そもそもスタッフ自体を揃えるところから始めなければならず、これが思いのほか難航していた。当初は酪農大学の中から募集しようとしたのだが、最初の呼びかけに反応してくれた人は誰もいなかつたし、個人的に何人かに呼びかけを行つたのだが色よい返事をしてくれた人物はいなかつた。時の人である鈴木氏の講演会と言う事もあり、そのプレッシャーに二の足を踏んでしまっていたのだ。結局スタッフに関しては、当時の川崎教授のゼミ生と、酪農大学で協力者である松本教授のゼミ生、またそれらのスタッフが集めてくれた学生によってメンバーを編成する事になった。

人手は何か確保できたが、講演会が 2011 年 3 月 13 日に決定すると、その時間の不足が非常に大きなネックになった。スタッフを揃えられたのが 11 月の終わりであり、残り 4 カ月未満で全ての準備を終えなければならないのである。勿論失敗は許されない講演会だけに、準備期間は周到に用意しなければならないところであったが、それさえもなかつたのだ。そして何よりも、一番の問題は鈴木氏本人に、まだ出演の了解をいたしていない事であった。

鈴木氏への講演依頼

予算なしの奥の手

今回の企画は学生主導による物である。と言う事は、資金面で見れば非常に弱く、その為本来支払うべき講演料を提示できない。つまり、実質的には無料で講演を引き受けでもらわなければならないと言う無理難題に突き当たる事になる。ただ鈴木氏は学生と接する事が好きであるというお話を聞き、可能性としてはあり得ると考え、我々は北海道大学に交渉に向かった。しかし最初の交渉では、やはり鈴木氏の講演依頼は難しいとの返事であった。何でも 3 年後まで講演会の予定が組まれているらしく、また鈴木氏自身がご高齢であるために過密スケジュールを組むのが難しいと言う事であった。

だからと言って今更諂める事も出来ない。すでに企画は動き出しており、川崎教授に奥の手を出していただいた。それは在京スウェーデン大使、ステファン・ノレーン氏に動いていただくと言う物であった。ノレーン大使はこの企画に強く賛同してくれ、また大使館におけるノーベル賞のお祝いの席でも鈴木教授に直接打診すると言う事で了承を得た。勿論この際、ノレーン大使もこの企画に出席していただけることとなつた。今にして思えば、他のところでは決してまねできない様な事であった。

講演会の手法は?

鈴木氏の出演と、それに合わせる形でノレーン大使の出席が決まり、私が当初思っていた者よりも遙かに重たい責任が襲い掛かってくる中で、講演会の手法はどのようにしていくのか? という問題が発生した。と言うのも、このお二人に出席していただく中で、単純な講演会は難しいと判断されたからである。また、林議員もこの中に加わるため、寧ろ講演会と言うよりは鼎談と言う形にしてはどうかという意見が出た。これならば、進行役がいればさほど遅滞なく進めていく事が出来るようになる。進行役を川崎教授にお願いし、ひとまずはある程度の準備が出来上がって言った。そして問題は、講演会場の選定に移る事になった。

公演会場選び

意外な難航

講演会の会場については、予想していたよりも難航してしまっていた。当初は市民ホールなど、江別市内の公的施設を使えるのではないかと思っていたのだが、公的施設を借りての講演会には費用がかかる。前述したように我々は資金面が厳しい為、費用が極力かかるない場所で講演会を行わなければならない。しかも、今回江別の活性化をテーマにしている為、江別市の外で行うと言うのは最初から選択肢から外していたのである。この為、果たしてどこが良いのか? と言う問題が発生したのだが、それに対して回答を用意してくださつたのは酪農大学であった。

酪農大学

江別市内には4つの大学が存在するが、の中でも最大規模と言えるのが酪農大学である。其の酪農大学にある学生ホールを使う事が出来れば、経費を安く抑えられるかもしれないと会議の場で提案があった。これには酪農大学の松本教授にご協力いただき、その上で酪農学園の浅田理事長にご依頼する事が出来た。浅田理事長は非常に気さくな方で、此方の申し入れに、学生としての活動で使うのであれば無料で提供できると言つてくださいり、学生ホールの貸し出しと、音響、映像スタッフの手配も松本教授を介してしていただけた。

メディアへの公表

公表前に何故か知られていた

鈴木氏の、しかもスウェーデン大使とともにに行う講演会と言う事もあって、当然メディアに周知する事になるのだが、我々は当初北海道庁の道政記者クラブでこの件を公表する予定になっていた。そこで初めて世間に知られる筈であったのだが、どこからリークしたのか、既に一部のメディアがこの事を知つて連絡してきたのである。まさかリークしていたとは思わなかつた上に、実行委員会が学生ばかりと言つて多少の注目が為されていた。ひとまず北海道庁道政記者クラブで詳細を説明すると言つて納得していただき、私は川崎教授とともに記者クラブへと向かった。

その場で今後援会の発表を行い、朝日新聞様と読売新聞様に記事を掲載していただいた。またラジオ番組でも。私と副委員長の納口さんとで告知をし、宣伝を行つた。更にスポンサーになっていただいたコープさっぽろ様は、イベントポスターを各店舗に掲示すると言つた形で宣伝していただき、我々はほぼ準備を終え、リハーサルに突入する事になる。そしてそのまま、3月11日に突入した。

東日本大震災

会議中に揺れた

3月11日。我々実行委員会は明日のリハーサルについての会議を行つてゐたのだが、その際に大きな地震を感じた。我々が会議に使つてゐた部屋は酪農学園大学の11階部分であり、思いのほか揺れていたのだが、我々のところでは大きな問題ではなく、そのまま数分間は会議をそのまま進行させていた。ところが、テレビにふと目をやれば、そこには恐ろしい光景が広がつてゐた。そこで初めて、我々はその揺れの重大さを知つたのである。

ノレン大使出席出来ず

東日本大震災による影響は、我々のところにも当然あった。もしこの講演会が13日でなく20日など、1週間ほどずれていれば間違いなく中止と言う事態になつてゐたが、開催まで2日と言う状況では開催するしかなかつた。だが、その一方でステファン・ノレン大使は大使館の方に詰めていなければならぬ事態となり、12日のリハーサル中に今講演会の出席を急遽キャンセルしなければならなくなつてしまつたのである。大使にとっても残念な結果であったが、我々としても非常に悔しく、私にとって一番の心残りがそれであつ

た。だが、それでも誰も中止にしようとは言わず、どうにか当日を迎える事が出来たのである。

当日

予想以上の来場者数

3月13日。我々は当日の来場者数がどの程度になるか全く予想が出来なかつた。一応の来場者数は分かっていたのだが、東日本大震災の直後で、来ようと思っていたが急遽キャンセルされると言う事も十分あり得たのである。我々はどうなるか、心配しながら入口を見つめていた。

しかし、実際には我々は250席の半分も来ないでは無いかと思っていたのが、実際には160名もの方に来場していただく事が出来た。無論キャンセルなどが発生したのも事実だが、当日来場を希望される方も多いのである。そして講演会が開始される。

第1部とワールド・カフェ

この講演会は、第1部と第2部に分かれ、その間にワールド・カフェと呼ばれる全員参加型のディスカッションが存在しているのが大きな特徴である。第1部ではまず学生たちが江別の活性化をどのように推進していくべきかをそれぞれ考え、それに対して来場してくださつた方々が質問する。この形式は非常に新鮮であったらしく、来場者の方々からおほめの言葉を頂けた。またワールド・カフェに關しても、普段なかなか話す機会をえられない型と話す事ができる場を提供できたことで、やはり称賛をいただけた。

第2部の対談。その後

そして第2部では、鈴木氏と林議員の対談が始まる。この時、私は疲れが出てしまつたのか酷い頭痛に襲われてしまい、一度その場を離れたのだが、実行委員会のスタッフ達はそれでも見事に仕事をこなしてくれた。私としては、彼らの助けがあつた事を嬉しく思つてゐる。

第2部終了後は懇親会と言う形で、鈴木氏を囲んでの立食パーティが催された。その際、多くの方から「素晴らしい」「また行ってほしい」との言葉をいただき、多くの方から賛同をいただけた事が非常に有難かつた。私にとってはこれ程有難い事は無く、再び機会があればと思わずにはいられない。

今後

結論から言えば、EbetsuShift Forumは単発の企画ものである。しかし、学生主導によるイベント自体は今後も行うべきであると考えている。私は第2回 EbetsuShift Forumが出来ないかどうかを考えており、それを学生に託してみたいとも考えている。

ライフクルージングのワールド・カフェ

もう1つの学生主導

この件に関しては、私は直接関与したのではなく、どちらかと言えば純粋な参加者の一人であった。しかし、学生主導と言う物を提供していた人間であったと考えれば、必ずしも無関係ではない。

ライフクルージングと言う学生、若い社会人で構成される組織が存在する。これは Ebetsu Shift Forum のスタッフが、今後の社会的活動を行うために組織した物で、彼らはここで様々な活動を行っていた。その日に行われたのは、スウェーデン大使館参事官を招いてのワールド・カフェであった。

このワールド・カフェでは、私は参加者の一人として一風変わった方々と面識を持つ事が出来た。また、出版関係の方とも話す機会を設けたことで、私の夢である小説家としての道も開けてきたのである。私はこの件に関する限りは主導者側ではないが、得られる物が多くかったのは事実である。

白熱教室

次期在京スウェーデン大使との公開講座

3カ国の学生と

2011年6月25日。私は白熱教室と呼ばれるイベントに参加していた。

白熱教室とはハーバード大学のマイケル・サンデル教授が行う講義手法であり、学生たちに様々な意見を述べさせる事を目的としている。今回の白熱教室では、次期在京スウェーデン大使であるラーシュ・ヴァリエ在ソウル・スウェーデン大使をコーディネイターとし、スウェーデンからの学生と、韓国からの留学生、更に東海大学の学生を交えての意見交換が予定されていた。

研究生として席を置く私も、当然この白熱教室に参加する事になったわけであるが、私はその場で壇上に上がって意見交換を行う立場になってしまったのである。自分の意見や主張を持っている人間が必要であったからというのが理由であるが、もう1つの理由として、日本の学生はやや消極的になってしまう傾向がある為、はっきりと発言出来る人間が必要だったので。私は壇上に上がってくる人々はそれなりに喋るのではないかと思っており、一応喋る内容も決まっていたので何とかなると考えていた。

消極的な学生

当日の壇上。前半と後半と言う風に分かれて行う中で、私はミャンマーからの留学生とも話をしながら当日に臨んだ。勿論ある程度話の筋が決まっているので、前半から此方の学生もしっかりと喋るだろうと思っていたのだが、思いのほか日本の学生たちは喋らなか

った。研究生と言う立場もあって、私は大学生から一步引いた立場に居ようとしていたのだが、どうもそう言うわけにいかなくなってしまった。実際前半終了後の休憩時間時には、「もっと喋ってくれ」と言われる始末である。私は学生たちの消極さに少し残念に感じながら、私個人が考えている事を話した。中には原発に関する問題もあり、私はその場で原発には地理環境等の問題を考慮しなければ建設は困難であり、国内での原発配備は難しい物があると指摘する等、自身の持論を展開していく事になるが、その後半は私のせいで学生が喋れない環境にあったように感じられる。

懇親会での会談

白熱教室後には、A P A ホテルで懇親会が開かれたが、ここで私はヴァリエ大使と親しくお話しする機会があった。立食パーティでの席ではあったが、そこでは日本の今後について多少なりとも議論できた。実際、日本の状況は芳しくないと感じられていたようだが、それでもやる気のある物がいれば大きく変えられるとの言葉をいただいた。私はそう言った人間になる様に努力したいと思っている。

2010 年から 2011 年の活動考察

誰も出来ない事をやる為に

私は 2010 年から 2011 年までの活動期間で、自分自身にとってはそう容易に経験できない事をたくさんしたと考えている。だが惜しむべきはこうしたチャンスがあまりにも少な過ぎる事ではなかろうかと考えている。チャンス自体はたくさんあるのだろうが、それを拾い集めるには学生の力だけでは限界があるからだ。ではどうすべきか？ それは学校側や周囲の大人たちが、学生たちにチャンスボールをより多く提供する環境を構築すべきである。

EbetsuShift Forum のように、学生は環境さえ整えば幾らでもその力を発揮できる。しかし實際にはその環境を与えられていない。それは社会の責任である。私も研究生から社会になる過程で、その重要性を強く認識し始めている。また同時に、早過ぎる就職活動が学生の活動を大きく阻害しているという認識も私の中にある。社会は学生に勉学のチャンスを広げ、尚且つ社会貢献のイベント参加を考慮すべきであると考える。それが私にとって、この活動期間における最大の主張である。

参考文献

- 社団法人北海道雇用経済研究機構『H E E R O』2011 年 5 月号
- 財団法人スウェーデン交流センター『ピヨルク』第 110 号
- EbetsuShift Forum ホームページ (<http://ebetsushift.jimdo.com/>)